

急速破壊型腰椎変性症（仮称）の3例

三浦 恭志 申 正 樹
 今釜 史郎 與 田 正 樹
 豊橋市民病院整形外科

川上 紀明 松原 祐二
 金村 徳相 後藤 学
 名城病院整形外科

Key words: 腰椎 (Lumbar spine), 急速破壊 (Acute destruction), 脊椎変性症 (Degenerative spondylosis)

はじめに

一般的に腰椎変性は慢性の経過で徐々に進行する加齢変化の1つであるが、明らかな要因なしに比較的短期間に変性の進行が見られた、急速破壊型腰椎変性症とも呼ぶべき症例につき報告する。

症 例

症例1: わずか2年で、L3/4間の変性が著明に進行した59歳女性(図1)。

既往歴に特記すべきことはない。

初診時、Kemp sign 陽性、深部反射は低下、間歇跛行100mで、JOA Scoreは12点であった。

MRIでL3/4間に椎間板炎を疑わせる広範なintensity異常を認めたが、血液検査に炎症所見を認めず、ツ反応は弱陽性(表)。椎間板生検で、炎症のない骨片および軟骨片が得られ、培養も陰性であった。

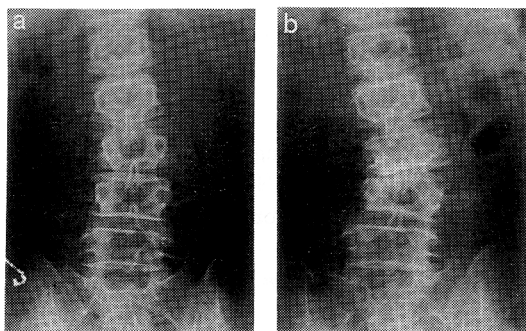


図1. 症例1
 a: 平成6年7月, b: 平成8年7月.

平成8年10月11日、L3/4前方固定術施行。術後半年、画像上L3/4の骨癒合は得られたが、移植骨がやや圧壊し、側弯の矯正損失を生じた。さら

表. 各症例の検査データ

症例1	
CRP	0.11
BSG	12 mm/h
WBC	6200
ツ反応	13×11 mm
Biopsy	骨片および軟骨片、炎症所見なし。 培養陰性(細菌、結核菌)
DEXA	0.432 g/cm ²
症例2	
CRP	0.1>
BSG	22 mm/h
WBC	9100
ツ反応	5×6 mm
Biopsy	変性椎間板、炎症所見なし。 培養陰性(細菌、真菌、結核菌)
DEXA	0.543 g/cm ²
症例3	
CRP	0
BSG	20 mm/h
WBC	6100
ツ反応	0×0 mm
Biopsy	変性椎間板、炎症所見なし。 培養陰性(細菌、真菌、結核菌 PCR)
DEXA	未施行